

## クワンティエンの夢

多谷昇太

## (六) 昼食、人柄ア・ラ・カ・ル・ト

庵の向かいのあずま屋と、そこからやや離れた草地の上にシートを敷いて然るべきグループに分かれてそれぞれに昼食を摂り始める。梅子の遺恨がいまだなくはないがいつものこととして皆気にもしていないようだ。中でも天衣無縫な郁子がそれぞれのグループを横断しながら各自が持参した弁当の中身を吟味し始めた。和歌を作るよりは料理のほうがよくほど得意と思えるほどの料理好きで、どうしても他人の弁当の中身が気になる様子である。まずは自分たちといっしょにいるお嬢様コンビから審査をはじめ。

「すごいですね、匡子さんと慶子さん、お重箱ですか。御自分で料理なさったんですか?」「そんな分けないですよ」「注文して前日に配達してもらったの、匡子と示し合わせて。和歌の野会らしく雰囲気を出そうと思つて。

ほほほ」と匡子と慶子がそれぞれ臆面もなく答える。その豪勢ぶりに感心すると思いきやしかし「そうですか。それでは見ても仕方ないですね」とつれなく云つて、今度は同じあずま屋内でもちよつと離れた席で弁当をひらげている織江と絹子のもとへと移動する。「わあ、可愛いっ！絹ちゃん和織ちゃんのお弁当。パンダとウサギをご飯やらとりそぼろで形づくったりして。手間がかかったでしょう、自分でつくつたの?」織江と絹子はほめてもらったのが嬉しいらしく顔を赤らめて首をふつたり頷いたりする。どちらなのか判らない。意味するところはどうやら母親か誰かに教わるか手伝ってもらったかしたようだ。亜希子が自分の弁当を置いてわざわざ見にやってくる。「まあ、本当。すごいわね。食べるのがもつたないくらい。写真に撮つておいたら?」「もう撮りました」織江が小さい声で答える。こしらえたところで家で撮つておいたようだ。「これはたぶん、醤油に浸したカツオ節で色をつけたお握りに、白いご飯のお握りをのせて。パンダをこさえたんですよ。目鼻立ちは海苔かな。わあ、マヨネーズで瞳まで入れたりして、超可愛いっ！待つてね、織ちゃんと絹ちゃん、また食べなさい。後学の為に写真撮つとくから。」そう云つて携帯カメラを取りに行く郁子。匡子と慶子にも見に行くよう

にとけしかける。織枝と絹子はなかなか箸をつけられそうもないが、普段注目されることがない分嬉しそうにしていた。

その様子をあずま屋からちよつと離れた所で眺めながら梅子グループが弁当を使っている。来る途中で買って来たフライドチキンに豪快にかぶりつきながら「梅子さん、弁当食べないんですか」と恵美が訊く。「あいつ（郁子）に見られたくないんだよ。うるさいつたらありやしない」「ほんとうすよね。花より弁当ですよ、見てたつてしょうがないじゃん」。しかし加代が「でも梅子さん、料理は郁子といい勝負じゃないですか。むしろ見せてやればいいのに？」と不思議がつて云う。普段から梅子の家に恵美とともに訪うかして梅子の料理好きとその腕のよさを知っていたのだった。郁子についてはこさえた手料理を時々部活に持ち込んで皆に食べさせるのでその腕のほどを熟知していたのである。両者の甲乙のほどは加代には付けがたかったし、食べるものこれすべて絶品のごとき恵美ではなおさらだった。ただ梅子が主に和食で郁子が西洋料理の違いはあった。亜希子に対するほどではないが郁子に対してもなぜか梅子にわたかまりがあつて、何事につけても率直に交誼を結び切れないのだった。今もそうである。しかしその郁子

がこちらは一切誰にもわたかまりなく、織枝と絹子の弁当吟味を終えてこちらへとやつて来た。「あたしのはケントッキー・ランチだよ」と先回りして恵美が云う。

「知つてますよ。近鉄吉野駅の前で買うのを見てたから。それもいいっぱい。部長と加代さんが別の店で幕の内弁当を買つたのも。お目当ては梅子さんです。さあ、梅子さん、御自慢の手造りのお弁当見せてください」と云うのに「うるさいわね。人の弁当を見て回つたりして、いやな子ね。あたしのは日の丸弁当よ。あたしを一個入れて来ただけ」とつれなく梅子が答える。弁当のフタをおさえていっかな見せようとしなない。だが向こうから亜希子の声がかかる。「謙遜謙遜。梅子の料理の腕はプロ級よ。そうね、リュックから伝わっていた匂いからすれば、そのふたの下はたぶん私や加代と同じ、幕の内よ。それも相当手の込んだ。チエダーチーズを巻いた椎茸にお肉の合わせ焼き…それにカボチャのバター焼き…あとは前日に仕込みをしたサケの照る焼きかなにかでしょう」と中が見えるかのように云つてみせる。はたして凶星なのか一瞬口を半開きにして梅子が亜希子を見やる。その隙に「あ、ほんとだ。これは凄い。さすがは和食の鉄人、梅子さんです。型ではない表情のおむすびと云い、おかずのレイアウトも…」と、この、勝手にフタ開けるな！」

「キヤ、ごめんなさい」と遣り取りしてはみんなを笑わせ和ませる。まったくのところ八方美人というのではないが一切人見知りをしたり臆することのない、郁子の〇型ぶりだった。蓋しこれは将来処世し行くにかなりの武器となる人の器と知れる。その天真爛漫の表情の奥にどのような狡知と度胸があるのか、未だ人には見せぬ、また本人自身が自覚もしていない、潜在した能力ともあるいは業とも付かぬもの持ち主であった。もし然るべき時と縁が至れば表出するのも知れないが今は皆の取り持ち役として、また道化役としてあるばかりである。

梅子から逃げ帰つて来たその郁子に「そう云う郁子さん、あなたこそどんなお弁当こさえてきたの？人のばかり見てないで披露なさいな」と匡子が訊く。息をはずませながらも「よく聞いてくれました、匡子さん。いまお見せします」と云つてリュックからちよつと大き目のサンドイッチケース二個を取り出し、フタを開けて中を見せる。「まあ、おいしそうなサンドイッチだこと」とその匡子「あらあ、またいっぱい作つて来たわねえ。こんなに、お一人で食べれるの？」慶子が聞き「さつすが、シエフ郁子。レシピを云いなさいよ」と亜希子が訊く。得たり賢しとばかり郁子は「これはですねえ、ちよつ

と手が込んでますよお。こちらの温かなのがアボガドとペーコンの辛子味噌あえサンドイッチで、こちらの冷たいのが小倉あんとバナナ、それに焼いたクルミとホイップクリームの合わせサンドイッチです。バターもたっぷり塗つてあります。こちらはまず豆板醤をレモン汁で溶いて、それに刻んだペーコンとアボガドを加えペースト状にし、それをパンではさみます。それをホットサンドプレートに入れて両面を焼けば出来上がり。こちらの小倉あんサンドは……」などと滔々と述べたあと、「みなさんに試食してもらおうと思つてこんなにこさえてしまつたんです。いかがですか、匡子さん、おひとつ」と進める。しかし大仰に手をふつて「うん、無理無理」と云つて箸で自分のお重箱を指し示す。慶子も同様で亜希子は「あとでいただくわ」とだけ云う。織江と絹子も同じもじしながら「あとで……」と部長に順ずるばかり。

人に勧めないで自分がまず食べればいだらうに、それも行かないのが、シエフ、の性なのか、それではとばかりあちらのグループに目を遣る。先程の一件などケロツと忘れ、ニコニコしながら梅子グループへと向かつて行く。ちよつと口にもを入れたばかりの亜希子がモグモグ云つて止める間もなく行つてしまった。「よお来たの、われ」という目で始め郁子を迎えた梅子だったが

なぜか急変し、笑みすら浮かべて「あら、上手に作ったじゃない。じゃあいたたくからそこに腰をおろしなさいよ。恵美と加代もいただいたら」と自分にも勧めてみせる。「おつ、うまそうじゃん」と云いざまアボガドサンドイッチを無造作に取って恵美がパクつきはじめ、左手にフライドチキンを持ったまま。加代は小倉あんの方を取って自分の弁当箱のフタに置き、行っちゃダメよとばかり「ほら、梅子さんの云つたとおりそこに腰をおろしなさいよ。ここで食べなさいよ」と親分の意を強要する。なぜ梅子がそうさせるのかその意を測りながら。「そうですね。では部長に断って来ます。向こうから飲み物を持って来ますから」と応じる郁子に「断んなくてもいいわよ。郁子の努力と好意を踏みにじるような奴らなんか、思わせぶりに、無言のままでも当てつけて来なさいよ」と云って梅子は自分の箸を置き、小倉サンドイッチを加代同様に取りつてはしかしこちらは無理にでもパクついてみせ、「うーん、おいしい」と世辞か本音か知らないが一言云う。いまさらのように加代が合点して「そうよお、わかつたでしょう梅子さんのやさしさが。部長、部長つてばかり云つてないでさ、あんたもそれなりに大物なんだから、梅子さんも一目置いてんのよ」と持ち上げてみせる。「一メートル五十五センチの私が大物とは思

えません。亜希子さんのコバンザメみたいな女ですし……とにかく一言断って来ます」と云って亜希子の側へもどろうとした刹那三十メートルほど先の路上に一人で坂を下つて来る鳥羽の姿を目ざとく発見する。「あつ、お爺さんだ！お爺さん！」と大声で呼びかけるのに「ば、ばか、止める……梅子がほおぼつたサンドイッチを口の中でモゴモゴさせながら止めるが後の祭りだった。サンドイッチを持ってあずま屋へと戻りながら「こちらに来てこれを召し上がりませんか？おいしいですよ」と絶好の試食者を得たと云わんばかりに自在に呼びかける。それに応えるかのように好々爺とした笑顔をいっばいに浮かばせながら鳥羽老人があずま屋へと近づいて来た……。

### (七) 鳥羽老人と歌合わせ

「いやー、もう堪忍堪忍。これ以上食べたら死んでしまいますがな」すつかりくちくちなつた風情で鳥羽が云うのに「そう云わずにフライドチキンもおひとつどうぞ」と好意からか恵美がなおも勧める。「やめて。もうやめて」と女言葉でそれに悲鳴をあげてみせる。さんざん逆らつたが今度も亜希子に強引に押し切られて、あずま屋

へと移動していた梅子が無然とした表情でそれを見詰めていた。「いやあ、まったく。けっこうなサンドイッチやらお重箱の料理やら、御馳走になつてもうて、ほんまにもうすっかり堪能しましたさかい、これ以上は勧めんどいてください。老い身には、いかにかなお食すべき、ですわ。ハハハ」。それとなく古語など使つて和歌の素養をかいま見せる鳥羽。持参した携帯ポットのお茶で食へ物を飲み下してひと息ついたあと、老人らしからぬ、ましてその知的で策士然とした風貌からも、ふだんは決してすまいと思われる突拍子もない話をいきなり開陳し始めた。しかしそれを聞くうちに一同はもちろんのこと梅子でさえも耳をそばだたせはじめた。「まあほんまに、一面識もない初対面の身で、何とあつかましい爺やと、皆はん、さぞやあきれてますやろ。無理もありまへん、私自身でさえそうなんやから……ふだんやつたらこんなこと私はようけしませんし、また出来まへん。節度は人一倍心得てますさかい。はい。実はな……いや、ハハ、こんなこと云うたらなお奇人あつかいされるやも知れまへんが、思い切つて云うてしまします。実は……昨晚夢を見ましてな。夢枕にどなたか知らん、西行はんでつしやるか、とにかくお坊はんが立ちはりまして、吉野へ参れ、仏縁に触れるべし」とおつしやられますんや。

ちようど今日という日は女房から竹林院での茶会に誘われてた日で、ほんまは行く気なかつたんやけど、何となく気になつて付いて来てみたら……ドンぴしゃでした、これが。はい。吉野山駅前であなたがたの姿を見た途端、これやーと思ひました。これが仏縁やつたんやと……」。しかしここで梅子が「なぜ私たちを見ただけで、それも遠くから、そんなことを感じたんです？ 女子大生のハイカーたちなんかそこらじゅうにいるでしょう？ それとも関西には女子大生はいないんですかね」などと思わせぶりにに訊く。「そんなアホな、ハハハ、そりやようけおりまつしやる。確かにおつしやる通りやけど、そりやのうて……何ちゆうかこう、ぐーつと目が引きつけられましたんや。まるで夢で見たお坊はんがあなたがたのそばに立つて、手招きでもしてるように思われて。矢も楯もなく運転手に、おい、止まれ」と命じて仏縁に順じてもうた次第です、はい」と一気呵成に語つて見せた。しかしなおも梅子が「本当に仏縁でしょうかね。もしかしたら魔縁、逆縁やも知れませんよ」と要らぬことを一言云う。どこかしらそう云わざるを得ないような観があった。「梅子」と垂希子がたしなめ「すみません、お話の腰を折つてしまつて……どうぞ、続けてください」と話の先を匂う。皆と同様に話に引き込まれているようだった。

「(梅子に) いや、ハハハ、ひよつとしたらそうやも知れまへん。だったらひとつ堪忍してやってください。しかしとにかくお嬢様かたのそばに来てみたら、私には何かこう、どう云つたらええんやろ、なつかしいような…ちよんご長年ほつたらかしにとつた家族に会(お)うたような…そんな気がしましたんねん。なぜですやろ?」と亜希子に向けてわざとらしく訊くの「わかりません」と左手で口を覆い、右手を顔の前でふつてその亜希子が苦笑する。無欲まじめに訊いたわけではないだろが敢て亜希子に尋ねたいという風情が鳥羽にはあった。しかしいかにもつかみどころのない話で、元よりそれを自覚している鳥羽は「いや、ハハハ、まったく無茶苦茶なことを云つてもうて。若い娘(いと)はんらの前で。ほんまにしようもない爺さんや。すんまへん。私、先ほども云いましたが鳥羽と申します。出版の会社に勤めてましたが今は定年退職して、楽隠居させてもらうてます。ひとつ、御縁いただけるとうでしたら、よろしゅうお頼申しあげます」と長口上を終えた…。

「なんか不思議。お話をうかがっているうちに私もそんな御縁を感じました」と匡子が云い「ねえ、ほんとに。私もそう。ほほほ」と相方の慶子が受ける。「おとうさま、という気がします。たしかに」とまじめ顔で云う郁

子も、またなぜか必要以上に恥ずかしがり、顔を上気させている(柄にもなく、である。ふだん決して取り乱さず、自分を失うことのない娘だった) 亜希子も、さらには無言のままにいる織江と絹子も合せて皆一様に話に打たれている観があった。前述したが、逆縁の、梅子でさえもそうである。転生をまたぐ、合縁奇縁の気がみなぎろうとする感すらあるのだが、しかし二人ばかりまったくそんなことに不感症の者がいてその内のひとり恵美が「匡子と慶子じゃないけど、まさに、お上手ですわ、ですよ。関西の、年寄り、は、年を取つてもなかなかやるもんですなあ」などと、若い娘の気を引く話をしやがつてとばかり、男のようなしゃべりかたでぬけぬけと云つてみせ、その場をぶちこわしてみせる。加代は加代で「梅子さん、いいんですか? あんなこと云わせといて」と小声で主(あるじ) 梅子に尋ねたりもする。その様子を見ながら舌打ちする思いで亜希子が「じゃ、恵美、あなたが鳥羽さんとの最初の歌台合せをしてね。関東の、男らしい、ところを見せてあげなさいよ。鳥羽さん、お手柔らかに、どうかよろしくお願ひします」と恵美を責めながらもなお氣遣いつつ、歌台合せの端を鳥羽に頼み込んだ。「お、おとうさまあの人、男でつか?」とふざけながらも鳥羽は歌を思案し始めた。やがておもむろに

「では」と云いさま「吉野来て会いたる娘（こ）らは冬枯れにまだきも咲ける桜花かな」と歌いさらに「もうひとつ、おまけでんがな」と断つて「名にし負はばいざ頼まはむ恵美ちゃんにどうか命をいじめないでね」となる戯れ歌をそえてみせた。指名された始めこそ「えっ」と驚いてたたらを踏んだ恵美だったが鳥羽の戯れ歌にたちまち顔を真っ赤にさせ、憤懣やるかたない表情となる。名にし負う、笑み、どころか弓矢の矢を撃ち込んで来

そうな仁王相とさえなつた。からかつておきながら「これは…」とばかりようやくこの娘のはんぼではない氣質に氣づく鳥羽だったがしかし臆する氣配はなく「どうですか？へたくそでつしやる。氣い悪うせんと恵美さん、ひとつ返したってください」とつみ込むように返歌を求める。そばで梅子がすばやく頭を回転させ「恵美」と小声で呼んでは手で口元を覆いその耳元に歌を伝えたようだ。「梅子」とたしなめる亜希子には「方人よ（かたうど…）一つに分かれた複数人の歌台わせて当該者に指示加勢する人」と答えて臆面もない。

それを受けて恵美が見てると云わんばかりに「では返歌します。などかさしも花の心は若くして老ひし人々に応えしもせじ、です」と朗々と云つてのけ、ほくそ笑みでは鳥羽をねめつける。「まあ、もう…」と匡子が

嘆息し「ひどいですう」と郁子が哀しげに云う。一同その場が凍りつくがそれを取り繕おうとして亜希子が何か云おうとするのにそれより早く「いかにご老人、なお御返歌あるべしや」と梅子がやつてしまふ。「すみません。失礼なことばかり申し上げて…」亜希子がとりなそうとするが「いや、なんも。ハハハ…」としかし鳥羽は鷹揚に笑つてみせた。だがさすがにその顔はひきつっていて、いくばくもなく「何や知らん、若いことがえろう自慢なようじゃが、ほな、儂（わし）の歌ではないが万葉集から一歌引きまひよか？こないはどや」とややまなじりを決しながら「白髪して子らも生きなばかくのごと若けむ子らにのらへかぬめや。あんたらもいつかは年取るんやろ。そんな時にこないして、若い人らから云われまくつたらどない思ううそりゃああんたら、少しは時間的空間的に立場を変えて、相手の身にもなつて考えることをせにや…」などと云つてしまい、さらにそれで終らず「そりやま、確かに今は爺かも知れんが、しかしこれでも人からは一目も二目も置かれてますよ。出版会社に勤めとつたというのは社長としてや。院政出版知りまへんか？あんたらみたいなお歌道を志す人たちならおそらく御存知やろ。和歌の公募も一年に二回ほどさせてもろうてますよ。儂の会社や。いまは息子にまかせ

とる。ついでに云えば新歌人協会の会長の方も勤めさせてもろうてます」と一気呵成にまくしたてる。穩健の仮面の下に隠していた経営者ならではの覇氣と、敢て云えば毒気までさらしてしまつた觀がある。とどめに「ま、若さ、だけ、はおまへんがな。ハハハ……」と高笑いをしてみせた。それを聞きながらかたやの梅子がさきほどの惠美に負けぬくらい顔を紅潮させている。それにはわけがあつた。実は常日頃から梅子はこの新興の新歌人協会に痛く心酔していて、その旨を垂希子始めみんなの前で広言してはばからなかつたのだ。のみならず自分たち白河女子大歌道部が本来属すべき旧来の歌人協会に対しては「師弟關係などという馬鹿げた歌塾の旧弊に、その人脈に、また身分や學歷、もつとひどければ喜捨の額の多少に偏重した歌人協会なんて、心底輕蔑するわ。そんなものはすべて、和歌の本来的な發展を阻害する要因以外のなにものでもない。単に和歌のみならず、日本社会を根本から阻害、逼迫させている日本人の悪しき習慣よ」と云つてのけ、返す刀でまさか会長が眼前の鳥羽とも知らず「新歌人協会こそ、その陋習を断つべき、日本社会に新たな布石を為す希望の灯よ。正論や実力が素直に認められる、あるべきオーガニゼーションだわ」などと宣言していた。事実院政出版の短歌誌「白菊」に短歌評論

と短歌三十首を梅子はすでに応募していたのだった。しかし本来これは決して許されることではなかつた。なぜならこれに立ちほだかるであらう旧来の老舗、歌人協会の会長が、他ならぬ白河女子大の学長にしてオーナー、白河征司その人だつたからだ。梅子は白河学長その人は自説にもかかわらずなぜか嫌いではなかつたが、如何せん後に彼の本音と睨んだ歌人協会の體質に対しては身震いがするほど嫌で、肯じかねていた。大体彼の学校経営方針と歌人協会のそれは甚だしく矛盾しているではないかと梅子には思われた。アメリカ姉妹校への留学とMBI取得を売り物にした、また企業とタイアップして實際的且つ効果的な學業を目指すとする大学に共鳴し、一流大学へ入れる學力を持ちながら敢てそれを蹴つて、特待生として梅子は白河女子大に入学していたのだった。もとより和歌が好きで（歌はうまいとは思わなかつたが）歌人としてまた歌人会会長としての白河の名前を知っていたからこそこのことでもあつた。現代的且つ合理的な學業方針と伝統的な和歌の精神を両立させる姿を粹とも捉えていた。實際のところ企業とタイアップするという白河の経営方針は当たり、大学乱立とそれゆえの学生數確保難の中にあつても学校経営に困ることはなかつた。ちよつとそれは奇しくも同名となる古の彼の白



河上皇が、摂関家から権力を奪って院政を敷くに至る過程とよく似ていた。上皇は台頭する受領階級を、また垂流に過ぎなかつた下位貴族たちを北面の武士や院近政の面々としてそれぞれ登用し、荘園主として私腹を肥やし続けていた摂関家を始めとする有力貴族たちから、天皇直轄領としてその班田を取り戻し天皇親政を実現したのであった。都に屋敷を構えて実質的な荘園管理を怠っていた貴族たちの足元をすくつたのである。彼の西行法師こと佐藤義清も、またのちの天下人たる平清盛もその典型的な受領階級、就中北面の武士の出身者である。語弊があるが現代の若者、就中学生たちを入学金や授業料を奉納する古の班田農民たちとすると、その獲得方法に於いて白河学長は優れていた。旧来の名門として胡坐をかいていた国公立大学などから学生たちを奪つてみせたのである。ちようど大学は出たけれど……とする超就職難の時期にも重なつていたのだが、そこに於いて将来の仕官や就職、あるいは起業を夢見る学生たちを、嘗ての義清や清盛ら野心満々の若者たちと見做すこともできるわけだった。しかし梅子の場合とは些か違つていた。野心がないわけではないがそれよりも、筋の通らぬことへの反感がなにしろ強かつた。能力のある者、況やそれを実証させて見せた者への認証と待遇はあつて

しかるべきだ思われてならなかつたのである。それから高じて言行不一致の人間にも我慢がならなかつた。合理的学業指針と不合理極まりない歌人会の指針はいったい何なのか。おかしいではないかと心中で常々白河を責めていたのである。とにかくこの白河征司、のちにこの物語の後編に御登場願うとしよう…。

話を戻すが斯様な経緯での梅子の恥ずかしさと無念さを悟つた加代が、その梅子の手を握つて無言のままになくさめる。恵美はいっそ鳥羽をぶつとぼしてやろうかと手をこぶしにしてふるわせるがさすがに実行までははばかられた。まつたくとばかり亜希子は鳥羽と梅子一派を見遣るがもとより心入れは身内の梅子ら三人にあるのだった、たとえ普段からどれだけ反抗の煩わしさを受けていたとしてもである。間違つても新歌人協会への梅子の思い入れを口にするつもりなどなかつた。一方鳥羽に対してはいささか大人げないと思つが、しかし本人が云うように意を決して端から心を開いてくれたぶん、それを拒否された時の怒りが相当強かつたのだらうとも思われた。けつして「いや、何も……」ではなかつたのだ。またなるほど経営者なら一皮剥けばこういう激高癖があつてしかるべきなのだろうと思われ、表面の温厚の顔はいつでも豹変するものと留意するしかない。亜希子

はまるで鳥羽がお上か殿様でもあるかのようにその美しい顔に愛相笑いを浮かべては「はい、はい、わかりました。わたしたちは若さだけしか取り柄がなくって：どうか御堪忍ください」と相手を持ち上げてみせる。他方加代同様立ちあがって来ては梅子の手を握り「梅子：」と目でこれをなぐさめた。しかし梅子はフンとばかり顔をそむけてしまふ。まったくこの先が思いやられたが梅子が指摘したとおり自らが独断で招いてしまった結果であり、ここは何とか取りつくろつて歌会を成立させるほかはない。つぎに万事心得ているだるう匡子か慶子と、自分のコバンザメと公言する郁子との間で歌合わせをさせようかなどもころんでいるとあずま屋から見て西南の方、風閣寺に通じる道から一陣の暖かい風が吹いて来て、その風に乗るように一人の托鉢僧がこちらへと歩いて来るのが見えた。そのまま通り過ぎるかと思つたら亜希子の目の前で立ち止り、網代笠に手をあててややこれを持ち上げ、ぶしつけにも亜希子の顔にまじまじと見入つて動かない。わけを訊こうとした亜希子の顔が相手の生理的な異臭で一瞬ゆがむ。つまり路上生活者のような異臭に。舌打ちをして鳥羽が追い払おうとしたがそれより早く「非顕教の純密の趣、はなはだ強し。ふただたびの難転なきにしもあらず」と難解な仏教用語をの

たまわつた。やや上げた笠の下からは不精髭をまごにはやした、陽に焼けた五、六十くらいの男の顔が見える。

その風体と異臭で僧形とは云え男の身分のほどが容易にうかがえたがしかしそれよりも、そのいかにも人懐っこい目に亜希子は強く引かれた。一瞬デジャビュを感じる。どこかで会つただろうか？ 思い出せないままに立ちすくんでいると男に見疎められていると勘違いした鳥羽が財布から一万円札を出して「おおきに。けつこうなお経でしたな。これで御精進ください」と云つて差出しながら、目とあこの動きで立ち去るよう托鉢僧をうながした。それまでどこか威厳ありげだった僧の顔にいやしげな表情が浮かび、「こ、これは…」と押しいただいた鳥羽に何度もお辞儀をしながらそのまま場を離れて歩き出した。思わず呼び止めようとする亜希子に「あかん、あかん」と首をふつて目付きで男の何者であるかを教える鳥羽だった。ほかの娘たちは失笑したり鳥羽に感心したりしている。しかしこの時ふたたび一陣の風が吹いた。身のみならず亜希子の心の中にまでそれは吹きわたる。金峯神社で感じた昔を、古代をしのばせる切(せち)なる風が。去つて行く僧の背に誰かを、なにかの祈りを感じる。亜希子は僧を追つて走つて行つた。

「あ、あの…どうか、どうかしばらく…ちよつと御い



つしよしませんか？いまの法話の続きをお聞かせください。そ、それに、お食事でもいかがですか？」と呼びかける。するとなぜか僧の顔に再びの威厳がたちまちのうちによみがえり、おうように垂希子にうなづいてはこちらへと共に歩を返しはじめた。あきれ返る鳥羽の顔が、また梅子の『も、もう、どうにでもしてよ。つぎはだれ呼ぶの？誰を。熊？』とでも云いたげなふくれつつらが垂希子の目に近づいて来た…。

(次号に続く)



古(いにしえ)からの吉野、金峯神社